



世界文学全集 10

ゴ ー ゴ リ

死 せ る 魂

鼻 外套 検察官

中村融 横田瑞穂 倉橋健 訳

河 出 書 房

世界文学全集 10 ゴーゴリ



© 1969

編集委員

阿部知二・伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和 38 年 1 月 15 日 初版発行

昭和 44 年 11 月 8 日 20 版発行

定 価 430 円

訳	者	中倉横	村橋田	融健穂
			瑞	
発	行	者	中島隆之	
印	刷	者	堀内文治郎	
装	幀	原	弘	

印刷・株式会社堀内印刷所
製本・中西製本印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 河出書房新社
神田小川町三の六 株式会社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0397-310110-0961

目 次

死せる魂

第一部

..... 三

第二部

..... 二七三

検察官

..... 四一三

鼻

..... 五〇九

外 套

..... 五四三

年 譜

..... 五八三

解 説

..... (小島信夫)..... 五八七

死
せる
魂（長編叙事詩）

——チーチコフの道中奇譚——

中ゴ
村　　
融ゴ
訳　リ

主要人物

チーチコフ（パーウエル・イワーノヴィッチ） 本編の主人公。
ロシヤの田舎をまわり歩き、実際には死んでいるが戸籍上は
生きていることになっている農奴を地主から買いあつめ、こ
れを担保に銀行から金を借り出そうとたくらむ。

マニローフ

サバケーヴィッチ

ノズドリョフ

プリューシキン

カローボチカ（女）

セリフアン 御者。

ペトルーシカ 下男。

地主。

裁判所長、郵便局長、警察署長、知事など。

第一部

第一章

ある県庁所在地の宿屋の門内へ、小型ながらもなかなかりっぱな、バネつきのブリーチカ（四輪馬車）が乗り込んで来た。こんなのを乗り回すのは独身者の連中で、それも退役陸軍中佐とか、二等大尉とか、さては農奴の百人もかかえていようという地主とか——つまりてっ取り早く言えば、中流どころの旦那衆である。馬車の中には一人の紳士が乗っていたが、別に美男子でもなければ、さりとて醜男（みにく）というのでもなく、肥りすぎても痩せすぎてもいず、老けているとも言えないが、さりとて大して若いほうでもなかった。この男が到来したからとて町には全然これといった騒ぎも起こらなければ、別段なんのへんてつもなかった。ただ宿屋と筋向かいの居酒屋の戸口に突っ立っていたロシヤ人の百姓が二人、なにやらぼそぼそつぶやいていたが、それも当の車中の客人よりはむしろ馬車についての話だった。「どうだ——と、一人が相

手に言った——なかなかおつな車でねえか！ おめえの考えじゃどうだ、ひとつ間違つたらあの車ならモスクワまで行きつけるか、それとも行きつけねえか？」——「行きつけるとも」と相手は答えた。——「なら、カザンまじや無理だ」と相手。これで話はもうすんでしまった。それともう一つ、馬車が宿屋へ乗り込んだときにそこで出合いがしらに顔を合わせたのは、おそろしく細くて短い縞木綿の白ズボンに流行をとり入れた燕尾服（タキシード）といういでたちで、下からはブロンズ（青銅）のピストル型の飾りがついたトゥーラ出来のピンでとめたシャツの胸当てをのぞかせていた若い男だった。この若者も途端に後ろを振り返ってちらっと馬車を見やったが、危うく吹き飛ばされそうになった縁無し帽を片手で押えると、そのままさっさと行ってしまった。

さて中庭へと馬車を乗り入れると、紳士は、宿屋の給仕というか、あるいはこれがロシヤの料亭あたりでよくいう「バラヴォイ」（（床拭き））というのか、ともかくきびきびと威勢のいい、顔の見分けもつかぬほどによく動き回る男に出迎えられた。その男はナフキン片手にすばやく走り出て来たのだが、これがまたのっぽの上にうしろ襟（うしろえり）が首筋にまで届きそうなぞろ長い、半木綿のフロックを

着込んでいて、髪をさっとひと振りすると、さしずめあいている部屋を見せに、さっさと板張りの廊下つたいに二階へとこの紳士を案内して行った。部屋といつてもありふれたもので、それもそのはず、なにしろ宿屋そのものにしてからが同じくありふれた、つまり、地方都市などにさらにあるやつで、客は一日二ルーブリも出せば静かな部屋をあてがわれはするが、その部屋というのがまた隅々からスモモのような油虫がちよろちよろ顔を出したり、隣室へのドアはいつもたんすでふさいであるというものの、その向こうには、黙り者で物静かな、そのくせ恐ろしく物好きで、新来の客の動静を細大もらさず知ることに興味をもつ客も陣どつていようというわけなのである。宿の正面の見てくれもまた実に中味にふさわしかった——それは二階建ての途方もなく長い建物で階下のほうは漆喰すら塗ってなくてどす黒い赤れんがのままだったが、そのれんがたるやまた、元来があまりきれいなほうではなかった上に、性悪な天候の変化をうけていよいよもってどす黒くなっている。二階は二階でこれも相も変わらぬ黄色いペンキ塗りで、階下には馬の頸圍だの、縄だの、輪パンなどの売店が立ちならんでいた。そうした売店の中の一ばんすみっここの店、というより窓の中には一人の蜜湯売りが控えていたが、これがそばに赤

銅のサモワールを置いて、自分もサモワールそっくりの赤ら顔をさらしているの、もし片方のサモワールがタイルそっくりの黒いあごひげをつけていなかったら、遠目には二個のサモワールが窓に並んでいると思われたかもしれない。

旅の紳士が自分の部屋を見回している間にその荷物が運びこまれて来た——まず第一には、だいぶ古びていて、旅は初めてではないぞと言わんばかりの白革のトラシク。このトラシクを運んで来たのは、皮外套を着た小柄な御者のセリファンと従僕のペトルーシカで、このほうはひと目で旦那のお下がりとなる古ぼけてだぶだぶのフロックを着た、唇と鼻のえらく大きい、どことなくがさつ者らしい三十がらみの若者だった。トラシクに次いで持ち込まれたのは木理のある白樺で嵌木細工にしたマホガニイの小形な手箱やら、長靴の木型やら、青い紙にくるんだ鶏の丸焼きやらだった。こうしたものが残らず運びこまれてしまうと、御者のセリファンは馬の始末に厩舎へ出かけ、従僕のペトルーシカは小さな控え室、というよりおっそろしく暗い犬小屋みたいなところに落ち着く算段をはじめたが、そこへはもうちゃんといつの間にか自分の外套と、それに伴う彼独特の臭気とを持ち込んであって、その臭気は続いて運び込まれた従僕用の

雑多な手回り品を入れた袋からもそれと察しがつくのだ。この大小屋では、彼はうまく宿の主人からせしめて来た、まるで揚げせんべいみたいにカチカチでべしやんで、その上ひょっとするとこれも揚げせんべいみたいに油じみているかもしれない小さな敷きぶとんまがいのものを幅のせまい三本脚の寝台に敷くと、そいつを壁ぎわに寄せてすえつけた。

召使たちが何かと片づけものをしたり、ごそごそやったりしている間に、紳士はホールへ出かけて行つた。この種のホールがどんなものであるかは——旅の経験のある人なら、だれでも知りすぎるほど知っている——ご多分にもれぬベンキ塗りで、上のほうは煙草の煙で黒くくすぶり、下のほうはいろんな旅人たちの、ことに土地の商人たちの——というのは商人たちは市日には六人連れ七人連れでここへ来てはきまってお茶の二杯ずつも飲んで行くからで——背中ではテラテラに光ってしまっている相も変わらぬ壁。それからこれも同じくすぶつた例の天井に、ガラス玉がたくさんぶらさがっている同じようにくすぶつた例の釣燭台だが、そのガラス玉は床拭きが海辺の鳥のように無数の茶わんをのせた盆を威勢よく振り回しながらすり切れた床の油布の上を走りまわるたびに、踊ったり、鳴ったりするので。それから壁という壁

に掛け並べられた、きまりきつた油絵。つまりどこにもさらに見かけられようという代物ばかりで、ただ強いて異色といえば、中で一枚の絵に、読者もおそらくついぞ見られたこともないほど大きな乳房をした水精が描かれてあることぐらいなものであった。もっともこうした自然のいたずらは、いつどこからだれの手でわがロシアの地へ持ち込まれたのかちよつとわからないような、といつても中には芸術愛好の士たるわが国の貴族たちが案内人の口車に乗って、イタリイあたりで背負いまさされて来た代物もあるにはあるのだが、とにかくそうしたいいろいろの歴史画の中によく見られるものののだ。さて、紳士は縁無し帽をぬぎ、虹色をした毛編みの襟巻きを首からほどいた。いったいこんな襟巻きは、女房持ちなら細君が手ずから編んでくれて、巻きかたまでちゃんと教えてくれるものなのだが、ひとり者には果たしてだれがこしらえてくれるものやら、そのへんのところは作者にもしかとはわからない。神のみぞ知ろしめすと言うほかはあるまい、なにしろ作者はそんな襟巻きなどはつい一度も巻いたためしがないのだから。襟巻きをとり終えると、紳士は食事を出すように言いつけた。そしてこうした宿屋でのおきまり料理、つまり、お客を見越してことさら数週間もしまい込んでおいた軽焼きピローグを添え

たシチュウとか、豌豆入りの脳味噌料理とか、キャベツをつけ合わせたソーセージとか、去勢鶏の焙肉とか、塩漬の胡瓜とか、いつでも出せるように用意してある甘い軽焼きピローグとか、そういったものの暖め直しや冷たいままのが次々と出される間に、彼は給仕、つまり例の床拭きをつかまえて、以前はだれがこの宿を経営していたとか、今はだれがやっているとか、収益は多いとか、おまえたちの主人はひどくいけ好かないやつじやないかとか、愚にもつかぬことをいろいろと詰問したが、それに対して床拭きは、これもおきまりのことだが、「へえ、旦那さま、そりやもう大した騙りでございますよ」と答えたものだ。文明開化のヨーロッパと同じく、文明開化のロシアでも、こんにちでは給仕相手に話をしたり、時にはおもしろ半分に彼らをからかったりしないでは、料亭で食事ができぬというお偉らがたがなかなかどっさりいらせられるのである。とは言うものの、この旅客は決して下らぬ質問ばかりしていたわけではなく——この市にいる知事はだれか、裁判所長はだれか、検事はだれかということも恐ろしく念入りに聞きただした。つまり、役人もお歴々のところは一人ものがさなかつたわけなのだが、なおそれにもまして根掘り葉掘りに、まんざら単なる興味からばかりでもないらしい身の入れ方でおもな地主

たちの残らずについて、いろいろと事もこまかに聞いた。だした——だれはどのくらい農奴をかかえているか、市からどれほど離れたところに住んでいるか、どんな性質の男か、市へはたびたび出て来るか、といったふうに。また地方の状態についても注意深く尋ねた——たとえばこの県下には流行性の熱病だとか、命とりのおこりだとか、天然痘だとか、そういったような疫病はなかったかということ、それも単なる好奇心以上のものを示す克明さで、詮索するのだった。紳士はその物腰の中になんとなくがっちりしたところをもっていて、時々ものすごい音をたてて鼻をかんだ。どうしたらこんな音が出るのか、そこところはわからないが、ともかく彼の鼻はラッパのような音を立てるのだった。ところでこの一見、まったく邪気のない威厳がかえって宿の給仕には多くの尊敬を感じさせたものらしく、そのためにこの響きが聞こえるたびに、給仕は髪を振り上げるといっそううやうやしく直立し、高みから頭をこごめて「なにかご用では？」と尋ねるのだった。食事がすむと、紳士はコーヒーを一杯飲み、長椅子に腰をおろしてクッションに背をあてたが、このクッションなるものがまた、ロシアの宿屋に備えつけのと来たら、ふかふかした毛の代わりに、なにかれんがが小石みたいなえたいの知れぬものが

詰め込んであるのだ。でも間もなくあくびが出かけて来たので、彼はさっそく部屋へ案内するように命じ、そこで横になると、二時間ばかりぐっすりと眠った。ひと休みすると、彼は宿の給仕の需めに応じて、型のごとく警察へ届け出るために、紙きれに官等氏名を書きつけた。床拭きは、階段をおりながら、それを一字一字やっつたように拾い読みした——「六等官、パーウェル・イワーノヴィッチ・チーチコフ。地主。私用にて投宿」床拭きがまだ一字一字を拾ってそれを読みわけている間に、当のパーウェル・イワーノヴィッチ・チーチコフはもう市の見物に出かけて行つたが、どうやら彼はこの市に満足させられたらしかった。というのも、この市が他の県庁所在地の市に比べていささかも遜色のないことがわかったからで、つまり、石造り家屋の黄色ペンキは強く目を射たし、木造家屋の灰色ペンキは慎ましやかにくすんでいたからである。家屋は平屋と二階建てと、それにも一つ県下の建築家連の意見では優美この上なしということになつている中二階を造りつけた一階半建てとであつた。場所によつてはこれらの家々は、野原のようにだだっ広い街路と、はてしない木の柵の中に置き忘れられたようにも見え、また所によつては、ひとかたまりにごちゃごちゃと集まり、そこでは人や動物の動きがいっそう目

立って見えるのであつた。ビスケットや長靴の看板が雨でほとんど洗い流されたようになっていゝるのも目にとまり、中には青ズボンの絵にアルシヤワ(ワルシヤワの誤り)の裁縫師何某などと署名入りのものあれば、縁無し帽や大黒帽の絵に「外国人ワシリイ・フォードロフ」(純粋にロシア人となと銘打ったものを)と書いたものもあり、かと思えばまた、わが国の劇場あたりで最後の幕になるときまつて舞台へのし上がつて来る客の着ているような燕尾服を着込んだ二人の遊戯者が撞球(ビリヤード)をしているところを描いたものなどもあり、その遊戯者がキューでねらいをつけ、両手をちよつとうしろへひいて足を斜にかまえたところは、ちよつど今しがた空中でとんぼ返りをやつたばかりというかつこうである。こうした看板の下にはどれにもみな「ここがその店です」と書かれてあつた。またそこらの路上にいきなりテーブルをすえて、胡桃とか、石鹼とか、石鹼そっくりの生薑パンなどを並べているのもあれば、丸々とふとつた魚にフォークを突き刺した絵看板を掲げた飯屋もあつた。そうした中で一ばんちよいちよい目に触れたのは、汚れた双頭の鷲の御紋章で、これは当今では至極あっさり「飲み屋」と塗りかえられてしまつてゐる。(酒類は政府の専売であるためその版売所には帝室の紋章を掲げた)舗道はどこもお粗末だつた。彼は公園もちよつとのぞいてみたが、ここ

にあるものは根つきの悪い、ひよろひよろの木ばかりで、根もとを三角形の支柱でささえられていたが、緑のペンキで塗り上げられたその支柱のほうがいっそはるかに見事なぐらいのものだった。もっともこんな蘆^{あし}ほどの丈もない樹木でも、かつて新聞にイリュミネーションのことが報道されたおりに、次のように書き立てられたこともあった——「わが市は今や市当局の尽力によって公園をもって飾られるに至り、その鬱蒼^{うっそう}と緑濃き樹木は炎暑の候に一段の涼味を与えつつあり」そしてさらに曰く「市民の心が感謝に溢^{あふ}れて打ちふるえ、市長閣下に対する随喜感佩^{かんぱい}の涙の滝のごとく流るるを見るは、誠に感激にたえざるところなり」つぎに彼はもし必要の際、中央寺院や、諸官庁や、知事の官舎へはどう行ったら一ばん近いか、とそんなことまで詳しく巡査に尋ねてから、市の中央を流れている川を見に行ったが、そのみちみち柱にはりつけてあるピラを、宿へもどってからよく読みなおすつもりではぎとったり、片手に包みをささげた軍服型のお仕着せ姿のボーイを従えて板敷きの歩道を通りすぎる眉目^{みめ}うるわしい婦人をしげしげとながめたり、そして最後にもう一度市の様子をよく覚え込んでおこうとでもするように、あたり一帯に目をさらしてから、まっすぐ家路につき、宿の給仕に軽くひじをささえられて階段

を上がって自分の部屋へとはいった。鰐腹^{たらふく}お茶を飲み終えると彼はテーブルの前に腰をおろし、ろうそくをもつて来させるように命じて、ポケットからさっきのピラを取り出すと、灯^{あか}りの方へ近づけて、右の目を心もち細めながら読みはじめた。けれどもそのピラには別段、注意に値するようなことは書いてなく——コツエブー（一七六一九ドイッ）の芝居が上演され、ロールの役はボブリョーヴイン氏、コーラはジャープロブ嬢で、他の役は特に取り立てて言うほどのことはない、とただそれだけのことであったが、それでも彼はそれをすっかり読みとおして、平土間の料金まで調べ、そのピラが県庁の印刷所で印刷されたことまで知り、さらにまだ裏にも何か書いてないかとひっくり返してみたが、何もなかったもので、目をこすり、それをきれいに巻くと、手にはいったものは何でも入れておく習慣になっていた自分の手文庫へしまってしまった。かくしてその一日は、犢^{うし}の冷肉一皿と一本のすっぱいクワスと、それに広大なロシア国のある地方の言いぐさで言えば、轡^{うしろ}を一ぱいに開いたほどのすさまじいいびき声を伴う熟睡とでどうやらけりがついた模様である。

次の日は終日訪問に費やされた。すなわち、客は市の高官連を残らず訪問に出かけたのである。まず知事をつ

ずねて敬意を表したが、会ってみると、これは当のチー
チコフ同様にふとつても瘦せてもいず、首にはアンナ勲
章をぶらさげていて、なお近く星形勲章までもらうこと
になっているという噂の人物だった。そのくせ、すこぶ
るつきのお人よしで、どうかすると自分でレースの刺繡
までやったりした。次いで彼は副知事のころへ回り、
それから検事、裁判所長、警察署長、専売官、官営工場
長官といったぐあい……。もちろん、こんなふうにと
この世の有力者たちを一人残らず数え立てるのは残念な
がらちょっと無理な話だが、ともかくこの旅人が訪問にか
けては、ひとかたならぬ活躍ぶりを見せたと言えはじゅ
うぶんであらう——なにしろ彼は医務局監督官や市の建
築技師のところへまで敬意を表しに伺候したのだから。
なおそれから彼はまだ長いこと馬車に乗ってからも、
もつとだれか訪問しておく人はなかったかとしきりに考
えたが、もうこの市には他には役人は一人も居なかった。
こうした有力者たちとの座談の間に彼は実に巧みにそ
の一人一人に取り入ってしまった。知事に向かつては、
この果へ来るとまるで天国のようで、道路という道路は
どこへ行ってもさながらピロードのようだとか、こうい
う賢明な大官を任命した政府は絶賛に値するとかいうよ
うなことをそれとなくほめかした。警察署長には市の

巡査のことで何やらとてもうまいうれしがらせを言った
し、まだどちらもやつと五等官に過ぎない副知事と裁判
所長に対しては談話の間にわざと間違えて、二度までも
「閣下」と呼んだりしてひどく彼らを喜ばせた。（「閣下」
等文官に對する敬稱「訳者」この結果、知事はさっそくその晩の内輪の夜
会にぜひとも御来駕いただきたいと彼を招待したし、ほ
かの役人たちもそれぞれ、ある者は午餐に、ある者はボ
ストン遊び（カルタの一種）に、ある者はお茶にと彼を招いた。
ところで旅人は自分のこととなるとあまり語りたがら
ないようなふうで、話すにしても、ひどく慎ましやかに
どっちつかずのことを言うだけで、そんな場合の彼の話
しぶりはやや文章がかった句調になった。たとえば、自
分はこの世ではまったくなんの意味もない蛆虫で、とう
てい、人様のご心配をいただくだけの価値のない者であ
るとか、しかし生涯の間にはさまざまな経験もつみ、官
途についていたころには、正義のためにはずいぶんつら
い辛抱もして、命までねらうような敵もたくさんもって
いたとか、今では落ち着いて暮らしたいと思つて、最後
の安住の地を探し歩いているのだとか、さればこそこの
市へ着くとすぐ錚々たる大官連に敬意を表するのを第一
の義務と考えたものである、とかいったふうに。さて以
上がその晩さっそく、知事の夜会に出席することを怠ら

なかったこの新来の人物について市の人々が知り得たすべてであった。この夜会に出る支度には、優に二時間余りの時が費やされたが、ここでもこの旅人はどこへ行ってもちよつと見られぬほどに念入りな身ごしらえ振りを示したものだ。中食後にちよつとひと眠りすると、彼はまず洗面の用意を命じ、内側から舌でつっぱりながら、恐ろしく長くかかって石鹼で両頬をこすった。それから宿の給仕の肩からタオルをとると、相手の鼻さきで二度ばかりブルブルと鼻嵐を吹いてから、そのまんま顔を耳の後ろからはじめて四方八方から丹念に拭き上げた。次に鏡の前で胸当てをつけ、鼻の穴からのぞいていた二本の鼻毛を引き抜くと、即座にピカピカ光るけいも色の燕尾服を着に及んだ。こうして身じまいをすますと、彼は自家用の馬車に乗り込んであちこちにちららしている窓々からわずかにもれる灯影にぼんやり照らしだされている限りもなくだだっ広い街路を揺られて行った。が、知事の邸は、いかに舞踏会のためとはいえ、いかにも明るく煌々としていた。角燈をつけた幾台もの馬車、車寄せの前の二人の憲兵、遠くで聞こえる御者の叫び声——つまり、必要な道具立ては全部そろっていたのである。ホールに足を踏み入れたとたん、チーチーフはちよつとの間、目をしかめないではいられなかった。

それほど蠟燭や、ランプや、婦人たちの衣装のきらめきがすさまじかったのである。なにもかもが光に満ちあふれていた。黒の燕尾服は、離れたり固まったりしては、チラつきながら動いていたが、それはちよつど夏も七月の暑いさかりに、年とった女中頭が開け放した窓ぎわで、チカチカ光る粉末に打ち砕いている真っ白に輝く砂糖の山に蠅がたかっているようだった。子どもたちはみんなその周りに輪をつくって、槌を振り上げる彼女のいかつい手つきを物珍しげにながめているが、軽い風に乗って舞い上がった蠅の空軍はわが物顔にしゃあしゃあと飛び込んで来ては、老婆の視力の弱さとその目を眩ます陽光の光を利用して、このおいしいごちそうを、バラバラの粉やころころの塊りにして方々へまき散らしている。ところで豊饒な夏季を満喫してそれでなくてさえ一足ごとに珍味にありついている彼らがこうして飛び回っているのは、決してこれを食べるのが目的ではなくて、ただただ自分を見せびらかすため、つまり、砂糖の堆の上を飛び回ったり、前脚なり後脚なりの片方を他の一方にすりつけたり、それで翅の下を搔いてみたり、両の前脚を延ばして頭の上ですり合わせたり、くるりと宙返りをして飛び去ったり、かと思うとまた新しくうるさい中隊を編成して飛来したりするためにほかならないのだ。さて、

チーチョコフはまだろくすっぽあたりを見回すひまもないうちに、もう知事に腕をとられて、いち早くその場で知事夫人に紹介された。客はここでも自分の品位を落とすようなことはせず、お世辞めいたことも何やら言いはしたが、それも身分の大してよくもなければ悪くもない年配の男としては至極板についたものであった。相手のきまった幾つかの踊りの組が一座の人々を壁ぎわへ押しつけてしまった時、彼は両手を後ろに組んで、ものの二分間ばかりばかに注意深くその連中をながめやっていた。婦人連は多くりっぱな、それも流行の衣装をつけていたが、中にはこの県庁所在地の市で間に合わせたような装りをしている者もあった。男のほうは、どこでもそうだが、ここでも二た種類に分かれていて——一方は痩せっぽちの組で、この連中はのべつ婦人連の尻ばかり追い回して、そのうちの二、三の者などは、ちよつとペテルブルグ人と見分けもつきかねるほどで、つまり、ペテルブルグで見かけるのとそっくりに、いやに念入りに氣取った櫛の入れ方をした頬ひげをはやすか、さもなければ、卵型のきれいな顔を見事つるつるに剃るかして、これまた同じようにだらしなく婦人連にへばりついたり、フランス語でしゃべったり、彼女たちを笑わせる手合いだった。いま一つの組、それは肥った連中か、さ

もなければチーチョコフのように肥りすぎて、も痩せすぎてもいないという仲間だった。この連中は前者とは反対に、婦人のほうは横目で見やっただけで敬遠してしまつて、それよりもただ知事の邸の召使がどこかにホイスト（遊び）用の緑色のテーブルをすえはしまいかと、ただもうきよるきよる方々を見回すほうに余念がなかった。この連中の顔は、ぼてぼてと肥つてまろく、中には疣のある者や、時にはあばた面のもいて、頭髮も前髪を立てたり、巻き髪にしたりはせず、さりとてフランス人たちのいわゆる「勝手にしやがれ」式でもなく、思い切つて短く刈り込むか、びったりなでつけるかしているの、顔つきはいよいよ丸くがっしりして見えるのだった。これは市のおえらがたの役人たちだった。ところで、どういうものかこの世では肥つちよ連のほうが痩せっぽちより仕事のしぶりが一段とあざやかである。痩せっぽちの勤めなんぞは多くはほんの囁託か、さもなければただ頭数に入れてもらつてあちこち尻尾を振り歩いていただけのこと、その存在たるや余りに軽く、空氣みたいにふわふわで、たのもしからぬことおびただし。そこへ行くとなつた連中のほうは閑職につくなどということは金輪際なく、いつもちゃんと真つ当の地位を占めるし、また、一たんどこかに腰をおろすとなれば、そのすわり振りが

まことにたのもしく、どっしりしているので、かえって地位のほうで顔負けして悲鳴をあげ、彼らの尻の下でめり込んでしまうくらいなのだが、それでも彼らは、いっかな動こうとはしない。見かけだけのきらびやかさなどは彼らの好むところではない。燕尾服にしても、彼らのほ瘦せっぽち連のほどすっきり仕立ててはいけれども、その代わりふところの中はお宝でいっぱいだ。瘦せっぽちのほうは三年もたてば、借金の抵当に置かない農奴なんぞは一人もなくなってしまうが、肥っちょのほうはじっと見ていると——まず郊外あたりに細君名義で買入れた家が現われ、次いで別の町はずれに別の家ができ、市の近在の村が手にはいり、やがては森から畑からそっくりついた村が、わがものとなるといったぐあいである。そしてとどのつまりは、この肥った連中は、神と陛下に対する勤めを終え、世間一般の尊敬をから得てしまふと、そこでめでたく職を退いて浮世を離れ、地主となり、光榮あるロシヤの旦那衆となり、お客好きの好々爺となつて安樂に余生を送るというわけになるのである。ところが、そのあと目にはまたしても瘦せっぽちの二代目が現われて、こいつがまたロシヤのならわしどおり、あれよあれよという間にたちまちにして親父の身上をすつてしまうのである。ざっとこんなふうの想念が、一座

の人々を見回した際にチーチョコフの心を占めたことはおおうべくもなく、そんなことから彼はけっきょく肥った連中の仲間に加わつたのだったが、そこには彼の見知り越しの顔がほとんど全部そろつていた——恐ろしく真黒な毛虫眉毛の持ち主で、「おい君、あっちの部屋へ行こう、ちよつと話があるんだ」とでも言いたげに左の目でいくらか目配せみたいなことをする、そのくせまじめで口数の少ない検事。背こそ低いが、皮肉屋で哲学者肌の郵便局長。なかなか思慮深くても愛想の好人柄の裁判所長——こうした連中が彼をまるで古馴染みのように迎えてくれたのだが、それに対するチーチョコフのあいさつぶりは、ややそっぽを向いてはいたものの、まんざらうれしそうでなくもなかった。そこでまた彼は、きわめて愛想がよくて腰の低いマニローフという地主や、初対面からいきなり彼の足を踏んづけておいて「いや、こいつは真っ平、真っ平」といった調子のサバケーヴィッチという男とも懇意になつた。なおここでは、さっそくホイスト遊びのカルタをも手に押し込まれたが、これも彼は例のいんぎんなお辞儀といっしょに受け取つた。彼らは緑のテーブルに向かつて腰をおろし、そしてそのままでもう晚餐まで席を立とうとはしなかった。座談も、人が仕事に打ち込んでしまふとよくあるように、すっか

り影をひそめてしまった。郵便局長は元来なかなかの口達者なのだが、それでも一たんカルタを手にしたが最後、たちまちその顔に考え深そうな表情を浮かべ、下唇で上唇をおさえてしまつて、勝負の間ずっとそのかっこうをしつづけていた。が、絵札で行くときには、彼は片手でどんとテーブルをたたいて、それがクインだと「えい！ おいぼれの梵妻め！」と言い、キングだと「えい、タンボフの土百姓め！」とわめくのだった。すると裁判所長は裁判所長で——「では、わしがそやつ口の口ひげをおさえてくれる！ では、わしがそやつめの口ひげをおさえてくれる！」とこう言う。ほかにもどうかするとカルタをテーブルにたたきつけながら「えいくそ！ どうともなりやがれ、しかたがねえからダイヤから行くか！」などと言ったり、かと思うとばかにあつさり「ハートだ！ ハー助だ！ スベ公だ！」とか「スベっちょだ！ スベちょこだ！ スベちょこりんだ！」とか、あるいはもつと簡単に「スベだ！」などという掛け声をわれ知らず口に出すのだったが、これはいづれも彼らが仲間同士の間で札を祝福する際に用いる名称なのである。勝負が終わると、いつもの伝でかなり大声の議論が行なわれた。われらの客人もやはり議論の仲間入りはしたが、それがいかに水ぎわ立っていたので、一座の連中は、この男

は議論もなかなか達者だが、渡り合いがいかにも垢抜けがしているわい、と感心したものだ。彼は決して「やりましたね」などとは言わないで、「おやりになりましたね、では一つここでああなたの二点を殺させていただきますようか」といった調子でやる。なお、なにかで相手を同意させようとする場合には、彼はきまつて、だれかれなしにエナメル塗りの銀のたばこ入れを差し出したが、その底には匂いを添えるためにすみれの花が二輪、ちゃんとしのぼせてあるのが目についた。ところで、この旅の客人の注意を特にひいたのは、さきに述べた地主のマニローフとサバケーヴィッチの二人であった。彼は裁判所長と郵便局長とにちよつとわきの方へ来てもらつて、さつそくその場で二人のことを聞きただした。この時彼の口から出た幾つかの質問はこの客人の肚が單なる好奇心ばかりではなく、なにか期するところがあることを示していた。というのも、彼はまずもつて二人のかかえてある農奴の数とその領地の状態とを尋ねてから、そのあとではじめてその名と父称とをただしたからである。そして彼はその後わずかの間にこの二人を完全に自家業籠中のものとしてしまった。地主のマニローフはまださきほどの年配でもなく、砂糖のように甘い目つきをして、笑うたびにそれを糸のように細める男だったが、これが